

で始まり、3-5、8-10、16-19番目で若干の種差があり、20番目以降からC末端側では比較的共通性が高く、全体的には種差は少ないといわれていたが、犬においても同様の傾向が見られた。

5. 今後、犬 BGP の抗体を作製し、他の動物との免疫交差性および骨再生過程における BGP 免疫組織化学的局在の変化など不明な点を明かにしていく予定である。

13. 塩化スキサメトニウムによる血中逸脱酵素遊離に及ぼすリドカインの影響について

遠藤裕一,¹⁾ 大友文夫,¹⁾ 岩本 暁¹⁾
今崎達也,¹⁾ 工藤 勝,¹⁾ 高田知明¹⁾
納谷康男,¹⁾ 國分正廣,¹⁾ 新家 昇¹⁾
五十嵐清治²⁾
(歯科麻酔,¹⁾ 小児歯科,²⁾)

塩化スキサメトニウム (SCC) の筋損傷に及ぼすリドカインの影響について、全身麻酔下での歯科治療が予定されていた28名を対象として、血中ミオグロビン、CK、GOT、LDH、K⁺値を指標として検討した。

全症例、笑気・酸素・ハロセンによる緩徐導入後に、硫酸アトロピン0.01mg/kgを静注し、I群ではSCC 1 mg/kgのみを投与、II群、III群ではSCC 1 mg/kg投与の各々、1分前、3分前にリドカイン1.5mg/kgを投与した。気管内挿管後は、笑気・酸素・ハロセンにて調節呼吸下に維持し、随時、動脈血液を採取し、normocapniaとなるようにした。採血は、硫酸アトロピン投与前、SCC投与5分後、30分後、60分後の各時点で、下肢の静脈より行った。

ミオグロビン値は、I、II、III群ともコントロール値に比べ30分値、60分値で有意に上昇した。しかし、60分値では、III群はI群に比べ有意に低い値を示した。また、5分値との比較では、I群は30分値、60分値とも上昇していたが、II群、III群では差はみられなかった。

K⁺は、II群、III群での5分値の増加がみられなかった。CK値では、I群、II群は60分値で有意に上昇していたのに対し、III群では増加はみられなかった。

以上のことから、SCC投与1分前、3分前に静注したリドカインは、共にミオグロビン値やCK値の上昇に、著明な影響を及ぼさなかったが、投与量や、投与時期を変更して検討することにより筋細胞の損傷を予防しうる可能性があることがうかがわれた。

14. 歯学部学生のHB_s抗原ならびにHB_s抗体の核医学検査結果の分析

—昭和63年度臨床実習生の実習前と実習後の比較—

西とも子、川瀬千景、金子昌幸
(歯科放射線)

今回私達は昭和63年度臨床実習生の登院実習開始時と終了時のHB_s抗原・抗体の保有状況をRIA法を用いて検査を行い、院内感染やHB_s抗原・抗体の推移について検討を行うこととした。

登院期間中に感染があったと推定される者は5名(4.4%)認められましたが、実習内容を考慮すると院外においてなんらかの要因によって感染をうけた可能性が強いと推定されるが、やはり院内感染を完全に否定することはできない。また、登院実習開始より以前に感染を受けていたと推定されるものは13名(11.6%)認められたが、皆、一過性感染であった。免疫機構が成熟した後

のHBV感染の場合は不顕性の感染が大部分で、急性B型肝炎を発症するものは一部である。

持続性感染(HB_sキャリアー)は認められませんでした。実習開始時と終了時のどちらにおいてもHB_s抗体が認められたものは5名(4.4%)認められ高抗体価の者が多く認められた。

今回、HB_s抗原、抗体の推移について検討を行ったが、不顕性の一過性と推定され発症した者は認められなかったが、抗原陽性時に患者などへ感染させてしまう危険性を考慮しなくてはならず、特に乳幼児などの免疫機構が未成熟な者の治療に際しては、持続性感染となる可能性